

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第458号 平成24年12月18日

迷惑行為とマナー

昨今、「迷惑だ」と感じる事が多くなったように思うのですが、読者諸氏は如何でしょうか？

「迷惑だな」と感じて、もしかしたらそれは「年のせいかも知れぬ」と思い、我慢している自分がまた情けなくもあります。

何を迷惑と感じるかは個人差があるとはいえ、屋外で遊んでいる子ども達の声うるさいと感じる人が増えているという話を聞くと、

少し寂しい気がします。「病人がいるから静かにしてね」という場合もあると思いますが、私などは、子ども達の元気に遊ぶ声を聞くとかえって気持ちが明るくなります。

このように、同じ場面でもそれを迷惑と感じる人もいれば、気にしない人もいますので、「他人に迷惑を掛けるな」というのは意外に難しい事です。

道の迷惑行為防止条例(公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止条例)では、

「粗暴行為(ぐれん隊行為)」

「卑わいな行為」

「たかり行為」

等が迷惑行為として列挙されています。

条文を読むと、自ずから迷惑行為の範囲が想定されますが、しかし、どのような場合でもボーダーラインというものがあって、竹を割ったようにすっきりとはいきません。

例えば、「粗暴行為」については、公共の場所や公共の乗物で、「多数でたむろし、いいがかりを付けたり、すごんだり」して公衆に不安を覚えさせたりする行為を迷惑行為としていますが、人によっては「多数でたむろ」しているのを見るだけで不安を覚えるでしょうし、「正当な理由がないのに、著しくしゅう恥させ、又は不安を覚えさせる」ような行為を「卑わい行為」として禁止されていますが、「著しいしゅう恥」というのも個人差が大きいと思います。

実生活の上では、迷惑防止条例には当たらないかもしれないが、しかし迷惑だと感じる事は少なくありません。

例えば、狭い電車の中で仲間同士騒々しくはしゃいでいる。ヘッドホンから「シ

「シャカシャカ」という音が漏れているのに、本人には一向に気にする様子がない、といった事は日常茶飯事です。更には、車内で化粧する女性を見ても驚かなくなりました。また、バスの中でも、窓側の席が空いているのに通路側に座る人がいて、この人は何を考えているのだろうと勝手に思ってしまう。

といったように、迷惑とを感じる事は数え上げればきりが有りませんが、何といても問題なのは、迷惑とを感じる人と、その原因者との認識の違いが大きい事でしょう。

大抵の場合、自分は周りに気を使っていると思い込んでいます。周りに音を出してはいけないのでヘッドホンを使っている事は間違いありませんが、でも耳元でかすかに聞こえる「シャカシャカ」というのは、正直神経に触ります。

バスの座席でも、通路側に座っている人に見れば「窓側の席を空けてあるのだから、座りたければ坐れば良い」と考えているのかもしれませんが。確かにそうではありますが、しかし、いちいち座っている方にお立ち頂くのも煩わしいという事で、ついつい座るのもためらってしまいます。

車内の化粧も、受け止め方には個人差が大きいと思います。少なくとも、化粧している方からは「誰に迷惑をかけている訳ではないのだから余計なお世話」といわれそうです。

結局のところ、ある行為が迷惑行為であるか否かは、当事者の人間関係や受け手の感じ方によって大きく異なりますので、「他人に迷惑を掛けてはいけない」という言葉を繰り返しても、それだけで問題が解決するわけではありません。むしろ大事な事は「他者を思いやる気持ち」なのではないかと思っています。

更に付け加えれば「恥かしいという気持ち」も忘れてはなりません。「そんな事をしたら世間様に笑われる」といった感覚は現代では薄れがちですが、しかし重要な事です。

「マナー」という言葉が有ります。これは礼儀作法と訳されていますが、単に形だけ真似てもそれだけでは「マナー」を守っているという事にはなりません。

マナーは、人が社会の中で気持ちよく生きていく上で、永年にわたって培われてきたもので、人間の知恵といっても良いでしょう。それは「他者への思いやり」が形となっただけでなく、マナー違反は世間の齟齬を買う、いい換えれば「恥かしい事」という意識もまた、マナーを守ろうとする力として働いていると思います。

ヘッドホンから漏れ出る「シャカシャカ」も、車内での化粧も罰則の適用はありませんが、周りの人々からは決して良い印象を持たれませんし、マナーには違反しているといわざるを得ません。

殺伐とした世の中だからこそ、「迷惑を掛けなければ何をしても良い」とはいわず、時に立ち止まって相手の立場になって考える、相手を思いやる、そんな心の余裕を持ちたいものです。（塾頭：吉田 洋一）